平成25年7月19日
横浜市公立大学法人評価委員会
資料 3

平成24年度公立大学法人横浜市立大学の年度計画に対する各委員評価一覧

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅰ　大学の教育研究等の質の向上に関する目標を達成するための取組	13	B	A	○国際総合科学部の再編による新しい学系・コースの設置、大学院生命科学研究科の設置及び先端医科学研究センター新研究棟の整備は、いずれもこれまでの着実な準備の成果であり、同時に本学の教育研究発展への大きなステップとなることであり、高く評価するとともに、それぞれが所期の目標達成に向けて今後着実に成果を上げることを期待したい。
			B	教育に関しては、質の保証、国際社会で活躍できる人材の育成および学生支援に於いて、積極的な努力がなされ、実績が上がった。研究面では、一部の進展は評価できるが、全体像が不明瞭。
			B	
			B	○本年度は教育に関する改善事項が見られ、質の向上が図られていることを評価したい。
			B	
Ⅰ-1　教育に関する取組	13	A	A	
			A	
			B	
			A	
			B	○教育の基本となる学系・コースの体系が整い、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシーも確立され、FD推進委員会を中心に各教員の意識向上も図られるなど、教育体制が整備拡充されたことは評価できる。加えて少人数指導体制に向け、新規専任教員の採用、教員人事の推進等により教育環境の改善に努力されたことも評価できる。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅰ-1-(1)全学的な取組	13			○少人数制指導充実のため国際総合科学部で教員の新規採用に努めていることを評価。 ○地域連携の一環として高校との高大連携の充実に努め、重点3高校との連携を強化。 ○アカデミックコンソーシアム事業の充実に努めるとともに、タマサート大学等参加各大学との間の教育研究連携の包括的協定の締結に努めていることを評価。 ○YCCスクール発展のため関係4者と覚書を締結、事業発展を進めていることを評価。
				○教育の質の保証に関する各種の取り組みが、着々と実行されている。アカデミックコンソーシアムの進展、学生のフィールドワークの拡充など、グローバルな教育環境が整いつつある。
				○世界銀行等と協力して英語による夏季集中講義を開講し、世銀とのMOUを具体化できたことは評価できる。アカデミックコンソーシアム推進に向けた四大学間合意やタマサート大とのMOUについても、今後それらを基に大学の質の向上につながる具体的取組を期待したい。
				○本学の呼びかけにより4大学学長ミーティングが開催されたことなど国際的に大学間協力体制の構築が進んだこと、海外フィールドワークに多数の学生が参加できたことを評価する。
				○少子化時代を反映して、学生の志願者数が年々低下する傾向がみられ、特に国際総合科学部に於いては、合格率が2倍を下回るなど学生の質の低下が懸念される。加えて、卒業できない留年者の数や、休学者の数も増加傾向にあり、これも気懸りなことである。いずれも大学運営にかかわる基本的な課題であり、原因究明と対応策が急がれる。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅰ-1-(2)学部教育に関する取組	22			○学生の学力の実情に即し、リメディアル教育及びPEによる英語教育の充実に努めている。 ○国際総合学部で修業年限短縮制度（5年一貫教育プログラム）の開始を決定し、また文科省のGP事業でYCU型高大一貫科学者養成プログラムが採択されたことは、優秀な理系学生の育成を進めるうえで効果的であり評価できる。 ○国際総合科学部の全授業科目についてGPA制度の本格運用を開始したことを評価する。今後その成果を学生の学習や生活指導（進路指導、授業料減免等）等に幅広く活用していくことを期待したい。 ○国際総合科学部で学生担任業務マニュアルを作成し、医学部でも担任制を導入し面談結果による個別の学生台帳の作成を進めるなど学生支援の充実に努めていることを評価する。 ○海外フィールドワークに年間約300人（各学年学生数の約30%）が参加していることは、学生の国際的意識・関心の涵養の観点から高く評価する。また英語による授業科目及び受講学生数が着実に増加していることを評価する。
				○国際社会で活躍できる人材の育成をめざし、教育面での取組（教養ゼミの実施、PEの一層の充実、フィールドワーク参加学生の増加、専門教養の英語での授業開講の準備、留学生の学力の質保証等）が顕著である。
				○文科省に採択された「YCU型高大院一貫科学者育成プログラム」やGPA制度の本格運用及び医学部における担任制導入等により、学生の指導育成体制がさらに整備され順調に運用されたことは評価できる。 ○医師の国家試験合格率が高い水準に戻りつつあることは評価できるが、一方で看護師の国家試験合格率が100%を切ったことは残念である。
				○医学部において、「2023年問題」や「総合診療医」などの、これからの課題を意識的に取り上げて、取組を始めていることは評価できる。
				○文部科学省のGP事業である理数学生育成支援プログラムに『YCU型高大院一貫科学者育成プログラム』が採択されたことは評価できる。 ○懸案であったGPA制度の本格運用を開始し、成績評価の現状を検証し、評価方法、基準の見直しにつなげたことは評価できる。 ○国際化に向けた取組の柱として、アカデミックコンソーシアムの推進を図り、初めて4大学（市大、マレーシア科学大学、タマサート大学、フィリピン大学）学長ミーティングを開催するなど、着実に成果を上げつつあることは評価できる。また、海外フィールドワークで、学部生、大学院生を含め前年を大幅に上回る282名が参加したことも、国際化進展のステップとして評価できる。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅰ-1-(3)大学院教育に関する取組	35			○生命医科学研究科の設置に伴う既存の医学研究科との役割分担については基本的方向は明確化されているが、同時に両研究科間の領域横断的な教育体制の在り方についてさらに具体的な取り組みを期待したい。 ○生命ナノシステム研究科をはじめ多くの研究科において入学定員及び総定員を充足できていないことは残念であり、定員数の見直しを含め今後の改善方策を早急に検討されたい。
				○生命医科学分野の再編、就業年限短縮制度への取組、定員の適正数の検討など、改革に向けた動きが進んでいる。
				○生命医科学分野の世界的レベルの研究拠点となるための第一歩である生命医科学研究科の設置について、文科省に届出を行ない計画通り25年4月に開設できたことは評価できる。初年度は定員を満たさなかったことは残念であるが、優秀な学生獲得のためにまずは応募者増に向けて更なる本学科の周知に取り組んでいただきたい。
				○YCU型高大院一貫科学者養成プログラムがGP事業として採択されたことは評価できる。
				○生命医科学分野の研究拠点を目指し、大学院の医系、理系を中心に再編し、『生命医科学研究科』設置を文部科学省に届出を行ったことは評価できる。（平成25年４月開設され順調にスタート）今後の成果を大いに期待する。 ○文部科学省「がんプロフェッショナル養成基盤推進プラン」に採択され、新たに博士課程に『先端的がん治療専門医療人養成コース』を設置したことは評価できる。 ○看護学専攻の充実に向け、専門看護師（CNS）教育課程の追加、再申請を行い精神看護分野のCNSの決定を受けたことは評価できる。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅰ-1-(4)学生支援に関する取組	38			○授業料減免について新基準導入等の改善進めていることを評価するが、各種奨学金受給者数の確保についても一層の取り組み強化を期待。 ○保健管理センターの体制整備等を通じてきめ細かい個別のケアの充実に取り組んでいることを評価。 ○全学的なキャリア支援体制の整備を進め、また高い就職内定率（国際総合科学部、大学院修士課程）を評価。
				○福浦キャンパスに於ける学生ハンドブックの作成、学生への経済支援の充実、心身ケア支援、就職支援の充実とキャリア形成支援委員会設置の承認など、各種学生支援は概ね順調に進展している。
				○授業料減免制度について新基準の追加及び制度周知の強化を行い、より充実したものとしたことは評価できる。 ○未内定者対策の実施によって国際総合科学部及び大学院前期課程の全研究科で、23年度を上回る就職内定率となったことは評価できる。またキャリア形成支援については委員会の25年度設置等が新聞記事となるなど注目されており、今後の更なる実効ある取組を期待したい。
				○軌道修正型授業料減免、緊急応急型授業料減免をはじめ、「真に救うべき学生」に支援が行き渡る制度としたことは評価する。キャリア教育が重視され、高い就職内定率となったことは、地味ではあるが評価する。
				○授業料減免制度について新たに2つの制度を実施したほか、運用基準の見直しを行ない学生の利便性が高まり、経済支援が充実したことは評価できる。 ○学生のキャリア支援をより一層図るため、新たに1，2年次生を対象としたキャリア支援講座を開催したほか、全学的なキャリア形成支援を検討する委員会の設置（平成25年）に向け準備委員会を精力的に開催し、体系図と委員会規程を作成したことは良とするが、その具体的成果を期待したい。
Ⅰ-2 研究の推進に関する取組	45	B	B	
			B	
			A	
			B	○サポート体制の工夫により研究費獲得に成果が上がっていることを評価する。
			A	○戦略的研究推進費について中間評価を実施し、ユニット構成を決定するとともに、平成25年度からの事業の取組み方針により公募テーマも決定するなど、学術院を中心とした研究活動が徐々に軌道に乗りつつあり、成果を期待したい。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅰ-2-(1)研究水準及び研究の成果等に関する取組	45			○過去最高の外部資金を獲得したことは評価するが、受託研究費・奨学寄附金とも受入額が減少していることは残念。更なる努力を期待。 ○エクステンション講座の充実につとめ受講者増を図るとともに市西部地区での事業展開や外部機関との連携講座の開催等を通じて地域貢献を進めていることを評価。
				○外部研究費獲得への取組が功を奏して、過去最高の獲得額となった。
				○24年度の外部研究費獲得額が過去最高の36億9千万円となり、さらに文科省事業でNMR新規装置導入補助金14億5千万円を獲得できたことは、大いに評価できる。
				○平成24年度の外部研究費受入額（新規・継続）が過去最高の約36億９千万円となり、さらに文部科学省の事業でNMR装置の高度化取組予算が採択され新規装置導入時に係る約14億５千万円の補助金を獲得することができたことは評価できる。 ○研究成果や知的財産の地域社会への還元については、地域貢献センターの推進により、市民医療講座、エクステンション講座とも開催日数、参加者数が順調に拡大しており、高く評価できる。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅰ-2-(2)研究実施体制等の整備に関する取組	49			○産学連携ラボへの企業の入居が進むなど先端医科学研究センターの新施設が順調に活動を開始している。 ○ヒトips細胞から肝臓類似体を作成する基盤技術の開発が順調に進み社会的にも注目されていることは本学の研究充実の一端を示すことであり高く評価。
				○先端医科学研究センターの新施設およびスタッフを含む研究体制は充実している。先進的ながん治療の研究も継続して行われているが、理系の研究の全体像が見えにくい。
				○生命医科学分野の世界的レベルの研究拠点となるための生命医科学研究センターについて、計画通り25年4月に開所し「産学連携ラボ」も4室全て入室するに至ったことは大いに評価できる。 ○京浜臨海部ライフイノベーション国際戦略総合特区において、iPS細胞を使ってマウス体内に人間の肝臓を作り出すことに成功したことは世間の注目を集めており大いに評価できる。本学での経済特区事業の各研究が内閣官房視察でも高い評価を得たことや、横浜市推進プロジェクトの約半数が本学研究者と企業の共同研究によるものであることも、本学の研究水準の高さを表しており評価できる。
				○先端医科学研究センターは小さい研究所ながら、優れた成果の上げられる研究者と設備が整い、今後が大いに期待できる。
				○先端医科学研究センターが予定どおり、平成24年12月に竣工し、平成25年4月に開所、新施設内「産学連携ラボ」も公募により4室全て入室となり、順調にスタートを切ったことは評価できる。 ○京浜臨海部ライフイノベーション国際戦略総合特区において、IPS細胞から人間と同じ機能を発揮する肝臓の作製に成功し、世界初の研究成果として世界から注目されたことは高く評価できる。 ○また市の推進する16プロジェクトの内、7つのプロジェクトに取組み研究を進めたことも評価できる。
Ⅰ-3 教育研究の実施体制の整備に関する取組	52	B	A	○学術院が情報教育やキャリア形成支援等の教育課題にも積極的に取り組み、活動の実質化を進めていることを評価。計画通りとはいえ諸般の準備を着実に整え大学院生命医科学研究科が開設され、教育研究をスタートさせたさせたことを評価。
			B	○学術院設置の目的を達成する柔軟な教育研究体制の、早期構築を期待する。
			B	
			B	○京浜臨海部ライフイノベーション国際戦略総合特区を初め、期待できる取組が始まっている。空回りしないで着実な成果が上がるようなサポートをお願いしたい。
			B	○領域横断的な教育研究や新たな課題に臨機に対応するため、平成23年4月にスタートした学術院が2年目となり、生命医科学研究科の設置、タンパク・ゲノムユニットの外部研究費獲得など一定の成果を上げつつあるが、新たな課題、研究テーマの設定など、一層の積極的な活動を期待したい。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅱ　附属２病院（附属病院及び附属市民総合医療センター）に関する目標を達成するための取組	53	B	B	○引き続き両病院の役割分担の明確化に努めるとともに、地域医療機関との連携強化に努めていることを評価。 ○自立的な経営基盤の確立を目指し病床稼働率の改善、診療科別原価計算の活用等を通じ収益を大幅改善させたことを評価。 ○長期の不適切な安全管理の結果重大医療事故が発生したことは遺憾。
			B	
			B	
			B	
			B	
Ⅱ－1　医療分野・医療提供等に関する取組	53	B	A	○両病院の役割分担の明確化を進める中でセンター病院が小児患者の受け入れ環境を整備するとともに、生殖医療センターの開設により生殖医療の主たる担い手として多数の患者を受け入れたことを評価。 ○両病院とも引き続き先進医療への取り組みを進めている。 ○両病院とも地域医療機関との連携強化に努め、特にセンター病院で高い紹介率・逆紹介率を実現していることを高く評価。
			A	○附属2病院が診療内容を相補的に分担して、先進医療・救急医療を提供している上に、地域医療機関との連携強化に取組み、地域貢献を果たしている。臨床研究・治験への取組も進んだ。
			B	○センター病院で新規開設した生殖医療センターの外来患者数が、当初見込みを大きく上回ったことは世間のニーズにマッチングしていたことの表れであり、評価できる。不妊治療は少子化対策にも寄与するものである。 ○附属病院はがん医療や二次救急医療、センター病院は高度救命医療や周産期医療、という役割分担の明確化や、先進医療の申請・承認等の計画も順調に実施された。
			A	○センター病院の生殖医療センターは横浜市民にとって重要な施設であり、その開設を評価する。両病院とも紹介率、逆紹介率も高く、今期は経営状況も改善している。ご努力を高く評価したい。臨床研究・治験の体制についても評価したい。
			A	○市ならびに県の政策医療を計画通り実施したことに加え、平成25年１月より横浜市認知症疾患医療センターの委託を受け、平成25年３月には神奈川県がん診療連携指定病院の指定を取得するなど、積極的な対応を図ったことは評価できる。 ○附属２病院の役割分担、特色を明確にし、特に救急医療の受入体制の整備や生殖医療センターの開設など医療体制の充実が図られたことは高く評価できる。 ○地域医療機関との連携も着実に進められ、連携病院の増加のほか電子カルテ導入により地域連携システムの活用が円滑化し、逆紹介率の大幅向上につながったことも大いに評価できる。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅱ-2　医療人材の育成等に関する取組	59	B	B	○センター病院での病棟実習が順調に開始され実習の充実が図られている。 ○臨床研修医の育成に意欲的に取り組み、両病院も全プログラムで定員充足率100%を達成したことを評価。 ○両病院で女性医師支援枠による非常勤医師の採用数を拡大している。
			B	○臨床教育研修センターの設置で、臨床研修医の育成に効果が上がることを期待する。女性医療スタッフが継続して勤務でき、かつ復職できる環境づくりを更に推進して欲しい。2病院とも病院実習の環境が整備された。
			B	○臨床研修医の育成については、23年度まで定員割れであったが、24年度マッチングは各種取組により2病院4つのプログラム全てにおいて定員充足率100%を達成できたことは評価できる。今後の継続を期待したい。
			B	○平成24年度の研修医マッチングは100%となった。これは研修医によい教育をして来た結果であり、評価できる。
			A	○医学科定員増に伴う病棟実習の充実のため、センター病院内に医学教育から臨床研修まで一貫したキャリア支援を行う『臨床教育研修センター』を設置したことは評価できる。 ○臨床研修医の育成について、メディカルトレーニングセンターなど研修環境の充実を図り、2病院計4つのプログラム全てにおいて定員充足率100%を達成したことは大いに評価できる。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅱ-3　医療安全管理体制・病院運営等に関する取組	65	B	C	○今年4月の重大医療事故は長期にわたる院内の不適切な安全管理の結果によることと推測され極めて遺憾。 ○両病院とも病床管理が適切に行われ、特に附属病院では3か月ごとの実績に基づく各科ごとの病床配分を見直しを行い病床利用率、平均在院日数を大幅に改善した。 ○両病院で診療科単位で各種の経営指標の活用等の努力により収益を大幅に改善した。
			B	○2病院で各部門システムや医療機器が異なるため、相互参照の機能がフルに稼働していないように見受けられる。2病院の総合力発揮のために、システムの統一は必要である。
			A	○昨年度大きな問題とされた病院の赤字経営、特に赤字が決算終了時までに判明しなかった点については、24年度に懸案の月次決算体制が整い、各種経営指標について毎月検討し効率的運用を図ることにより、両病院とも黒字決算となったことは評価できる。 ○附属病院を含む福浦キャンパスのESCO事業等が経済産業省の24年度省エネ大賞（事例部門）を受賞したことは評価できる。
			B	
			B	○安全管理対策会議、リスクマネージャー会議を通じたインシデント分析や医療安全研修の回数増などにより、即時公表の医療事故を0件にしたことは評価できる。しかし一方で一括公表の医療事故が2病院それぞれ1件発生しており、加えて平成25年4月には極めて杜撰な初歩的なミスにより重大な医療事故（即時公表）が発生しており、引き続き医療安全管理の徹底に努め、万全を期してほしい。 ○病院運営については、附属2病院とも診療単価及び手術件数の増により病院収益が大幅に増加し、経営収支比率が改善した。特に前年度赤字計上し懸念された附属病院について、中央手術室の体制整備、救急病床の整備等の拡充に加え、病床の効率的運用に注力し、手術件数の大幅増、病床利用率の向上等により一気に黒字計上となったことは評価できる。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅲ　法人の経営に関する目標を達成するための取組	73	B	B	○教職員の帰属意識を深め、また就労意欲の高い組織の実現を目指し、ほぼ毎月ごとの法人ニュースの発行の発行を始め各種の意識・実務研修の実施、教員のサバティカル制度の試行、教職員のメンタルヘルスケアへの充実した取り組み等きめのこまかい人事管理上の措置を進めていることを評価。 ○コンプライアンス意識徹底への更なる取り組みを期待。自己収入確保への積極的取組を評価。
			B	
			B	
			B	
			B	
Ⅲ-1　業務運営の改善に関する取組	73	B	B	
			B	
			B	
			B	
			B	○理事長、学長からの発信媒体として「YCU法人NEWS」の内容充実や附属病院の「病院ニュース」「医学部ニュース」の活用により、組織の一体感の向上、学内コミュニケーションの改善に努めていることが、うかがわれ、業務運営の改善に少なからずつながっていると一定の評価ができる。

年度計画（項目）			頁	自己評価	委員評価	コメント
		Ⅲ-1-(1)ガバナンス及びコンプライアンスの強化など運営の改善に関する取組	73			○コンプライアンス研修の実施、内部通報制度委員会の開催、ハラスメント相談体制の充実等運営改善への具体的取組が進められている一方で、病院における重大事故発生の素地が培われていたことは遺憾。
						○学内コミュニケーション改善への努力はなされている。その効果は？全教職員を対象としたコンプライアンス研修の実施などの努力は評価できる。
						○従来から課題とされている学内コミュニケーションの改善及びコンプライアンス推進体制の強化については、対策が適時実施されているが、その実効性については24年単年度に問題が起きなかったことだけで効果ありとの速断はできないと考えられ、次年度以降も注視する必要がある。
						○従来から課題とされてきた、ガバナンスの強化について、経営方針会議、経営審議会などの議題や出席者、運営方法について見直しを行ない、より議論の充実を図ったほか、理事長、学長、両病院長等による病院経営推進本部会議を毎月開催するなど、ガバナンス体制がかなり改善されてきたと評価できる。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅲ-1-(2)人材育成・人事制度に関する取組	75			○教員のモチベーション向上施策の一環としてサバティカル制度の試行に踏み切ったことを評価、今後の早期本格実施を期待。 ○昨年の労働契約法一部改正を踏まえ同法との整合性のなかで現行の教員任期制の運用とテニュアトラック制度の取り扱いについて早急な方向の明確化を期待。 ○保健管理センターと健康管理室の連携強化等を通じ教職員のメンタルヘルスケアへの取り組みが充実し相談件数が大幅に増加した。
				○公募による人事の採用は公平な方法ではあるが、よい人選ができているかどうか検証したことはあるか。
				○懸案となっていた教員のモチベーション向上を目的としたサバティカル制度が両学群で1名ずつ試行され、平成25年度より本格実施となることは評価できる。また、テニュアトラック制度について「人事制度等検討委員会」を設置し、労働契約法改正後の運用について課題と対応策を整理されたとのことであり、新しい視点から制度の具体化を期待したい。
Ⅲ-1-(3)大学の発展に向けた整備等に関する取組	79			○横浜市との連携のもとに新理科館の工事着工、文科系研究棟の耐震補強事業等八景キャンパスの整備が着実に進められていることを評価。 ○学生の海外派遣の増加傾向を踏まえ学生を対象とする海外での事件・事故等に際しての危機管理研修及び危機管理シュミレーション訓練を実施したことは適切な措置。 ○大規模災害発生時の情報バックアップ体制の整備を促進されたい。
				○卒業生が生涯利用できるメールアドレスを配布するアイディアは、よい方策と思われる。
				○耐震補強などを含め八景キャンパスの再整備について新理科館の工事に着手し、文科系研究棟耐震補強整備の実施設計を行うとともに、新付属校舎改築整備の基本設計の実施など施設整備が概ね計画通り進んでおり良とするが、安全にかかわる整備については早期竣工に向け一層の努力を期待したい。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅲ-1-(4)情報の管理・発信に関する取組	82			○ホームページ等各種媒体を通じ法令に定められた教育情報はもとよりそれ以外の各種情報の積極的公表に努めていることは評価するが、社会的に求められる情報（例えば中途退学率・卒業率、社会人入学者数等）の自主的公表へのさらなる積極的取組を期待。
				○個人情報の管理は念には念を入れて徹底して欲しい。教員が「Read & Researchmap」の更新を自主的に行うことを、徹底させているか。
				○大学総合データベースの計画中止、フリーメール導入の26年度への延期、「Read＆Researchmap」の運用開始の遅れ等、システム関係について計画の変更・遅れが散見される。
				○これまでの事故の反省に立って、個人情報の取り扱いに係る自主点検、研修を実施し、改善に向け努力されていることは一定の評価をしたい。ただ情報管理全般を体系的に、その重要度により分類、保管方法、管理責任者などが明確にルール化されているのか、やや不安が残る。
Ⅲ-2 財務内容の改善に関する取組	86	B	B	
			B	
			B	
			B	
			B	○平成23年度の指摘事項へ対応して、決算見込みについて傾向値に年度の特殊要因による増減を別途積上げ方式で反映させ精度向上を図ったことや、患者数動向、診療報酬、稼動額などの月次速報値により毎月分析し、対策を講じたほか、診療科別原価計算を完成させるなど、財務管理が一段と向上し、財務内容の改善に寄与したことは評価できる。 ○決算については、特に附属病院の中央手術室の体制整備救急病床の整備など拡充した施設整備が大きく寄与し、手術件数、入院患者数の増加に加え病床利用率も改善され、附属病院収益が大幅増収となり、好決算につながったと評価できる。一方で、教育研究体制の整備、医療体制の拡充など前向きな投資とは言え、教職員の大幅増により人件費が急増しており、今後に運営交付金の増加と合わせ課題を残す結果となった。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅲ-2-(1)運営交付金に関する取組	86			
Ⅲ-2-(2)自己収入の拡充に関する取組	86			○寄付金の受け入れに積極的に取り組み、インターネットによる振込みシステムを導入したことは評価。今後件数及び金額の拡充を期待。 ○科学研究費補助金や大型研究設備充実補助金の獲得等外部研究費の獲得、附属病院での治験受け入れ費増大を評価。受託研究費や共同研究費の増加を期待。
				○インターネットによる寄付金振込システムの導入により、寄付件数は今後増加することが予想される。しかし、平成24年度は総額が過去最高であったにもかかわらず、前年度より件数が減ったのはなぜか。
				○外部資金の獲得や寄附の募集活動について各種取組を実施し、寄附・外部研究費とも過去最高額となったことは評価できる。次年度以降の継続を期待したい。
				○寄付制度の充実について、ホームカミングデーや各種イベント毎にパンフレット等を配布し、広く周知する取組みを行ったこと。また、手続きの簡素化のためインターネットによる寄付振込システムを前倒して導入したことなど、寄付受納の基盤拡充を図ったことは評価できるが、件数、金額については一層の努力を期待したい。

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント
Ⅲ-2-(3)経営の効率化に関する取組	88			
				○ワークライフバランス勤務体制は、勤務時間を短縮するだけでなく、限られた時間内でそれまで以上の効率を上げる工夫がなされなければならない。
Ⅳ　自己点検及び評価関する目標を達成するための取組	89	B	B	○各年度ごとの自己評価結果の概要及びそこで明らかになった課題とその解決に向けた取り組みを簡明に整理し、公表することを期待。
			B	
			B	
			B	
			B	

年度計画（項目）	頁	自己評価	委員評価	コメント

■備考（総合的な評価コメント等）

〇第２期中期計画の第2年目にあたる本年度は、第1期中期期間におけるさまざまな基盤整備の努力が実を結び、国際総合科学部の教育体制の大規模再編（新たな学系・コースの設置）、大学院生命医科学研究科の設置、先端医科学研究センターの新研究棟の落成、センター病院の生殖医療センターの開設等の多くの顕著な実績を挙げ、また高い医療水準を確保しつつ両病院の収益の着実な改善を進めたことを高く評価する。法人化後の歩みの中でも注目に値する1年であったと思われる。この成果を踏まえつつ引き続き第2期計画の目標実現に着実に取り組んでいただきたい。
〇これまでのさまざまな不祥事を踏まえ、本委員会ではかねてから全学的なコンプライアンス体制の推進や医療安全文化醸成への取り組みの強化を要望してきた。しかるに本年4月に発生した附属病院における重大な医療事故はそれ以前の長期にわたる不適切な安全管理の結果齎されたものであると推測せざるをえない。またこの事故により市民の同病院、ひいては法人運営に対する信頼を失墜させることとなったことは極めて遺憾である。
　患者の安全を守ることは病院の最大使命であり、今回の事故原因の徹底究明を踏まえ病院を挙げての再発防止措置はもとより、その根底に大きく横たわっていると思われる教職員のコンプライアンス意識の徹底にさらなる強力な取り組みを期待したい。

〇平成24年度の計画は概ね実行されている。特に教育・研究面における国際化への取組は進展が見られた。附属2病院は、診療内容を相補的に分担して地域医療に貢献し、経営もよく行われている。先端医科学研究センターは、設備・スタッフとも研究体制が充実しているので、成果を期待する。

〇大学の教育研究等の質の向上に関する目標（特に国際化、生命医科学分野の拠点化等）、附属２病院に関する目標（特にタイムリーな月次決算管理による黒字化）とも、順調に実施され成果が表れている。
〇法人のガバナンス改革やコンプライアンス遵守については、24年単年度だけでは取組の効果について速断はできないため、今後も注視していく必要がある。

〇本年度においては、順調な大学運営がなされ、教育面では特に国際的な大学間の協力関係の構築が進んだ。また、学生が多数海外活動に参加するなどの国際化が進んだことは、本学の目指す方向に合致しており、評価できる。
〇研究体制に関しては、先端開発医療の分野での積極的な活動が行われ、大きなものではないが質の高い研究グループを形成して、国立の大きな総合大学とも伍しながら成果を出しつつあることは大いに評価できる。また地味ではあるが、臨床研究・治験の体制を整えていることも評価できる。
〇附属病院、センター病院とも経営改善につとめ、良好な成果を収めている。両病院の関係者のご努力を評価したい。
〇看護学科の国家試験では、従来よりかなり合格率を落とし、全国平均より少し上という凡庸な成績に終わった。これまで極めて高い合格率であっただけに残念である。合格率だけがよい教育の指標ではないかも知れないが、原因の分析をお願いしたい。

〇第Ⅱ期中期計画期間の２年目に入り、教育、研究、医療それぞれの分野で体制整備が進み、基本方針で掲げた教育重視、学生中心、地域貢献に沿って着実に成果をあげつつある。
　教育環境の整備、教育体制の充実が図られ、国際化についても語学教育の推進、拡充に努めるとともに、アカデミックコンソーシアムの展開など具体的な成果が現われつつある。研究の面でもiPS細胞に関連する大きな研究成果をあげ、また医療分野では地域中核医療機関として一段とその存在感が高まっている。
　さらに懸案となっていた法人経営について、ガバナンスの強化に努力され、経営審議会、経営方針会議等の見直しにより経営方針が浸透し、組織の一体感が高まり、理事長、学長、病院長の意思疎通も図られ、徐々に改善、充実の方向にある。
　ただ、少子化時代を反映して、志願者の数が特に国際総合科学部で低下傾向にあり、大学の魅力をどう高めていくのかが課題となる。加えて平成25年に入り、重大な医療事故の発生と准教授の逮捕事件という不祥事が相次ぎ、大学の社会的信頼を大きく損なう事態となり、その回復が急がれる。